

語りのテキストに関する日仏語対照研究 —語る視点をめぐって—

津田 香織

1. はじめに

本稿¹では、同一内容を伝えていることが期待される日本語とフランス語のテキストにおいて語る主体の在り方が異なる例を示し、考察を加える。ここでいう語る主体とは、語りのテキスト (histoire (Benveniste 1966) ; 発話行為から切り離された物語世界) において、出来事を捉え、言葉に表していることが想定される視点を指す。本稿では特に述語形式に注目して、語る主体の表れ方を見ていく。

本稿で分析するテキストは、日本語を原作とする小説『ノルウェイの森²』とそのフランス語翻訳書 « La ballade de l'impossible³ » の第1章である。この小説の中心は、第2章以降で語られる主人公「僕」の大学時代の出来事の物語である。それに先立つ第1章にもその物語の断片は見出されるが、第2章以降と大きく異なるのは、物語の語り手 (物語の時代より18年後の37歳の「僕」) が声を持ち、物語を語る経緯や動機を提示する点である。37歳の「僕」は第1章と第2章冒頭の数行以降は一切登場しない。つまり第2章以降で語られる大学時代の出来事は、語り手の離れ独立した物語の性格をもつものに対し、第1章では、物語世界と共に語り手の世界が描かれるのである。このようなテキスト内部の主体によって行われる発話行為を、histoire にも discours にも分類できないものとして、Simonin-Grumbach (1975) は « un troisième type d'énonciation » (ibid., 103) と呼んだ。今回観察するテキストでは、この仮想世界における発話主体の表出の仕方が日本語とフランス語とで異なることが観察される。

2. 分析

2.1. 分析対象

まず、分析の対象となる第1章のあらすじを示す。

(第1章 あらすじ)

飛行機に乗っている37歳の「僕」は、機内で流れはじめた音楽 (ビートルズの「ノルウェイの森」) を聞くことをきっかけに、自身の過去の体験 (18年前、19歳の「僕」が草原で「直子」から井戸の話聞いた日のこと) を思い出す。その草原で直子と交わしたく直子のことをずっ

¹ 本稿は2016年5月14日に行われた日本フランス語学会第306回例会での発表「日本語とフランス語の語りのテキストをめぐる一考察—『ノルウェイの森 / La ballade de l'impossible』冒頭部分を例に—」の内容に加筆修正を行ったものである。例会での発表で貴重なコメントをくださった皆様、発表に際して助言をくださった渡邊淳也先生、青木三郎先生に記してお礼を申し上げます。

² 村上春樹, 1987年, 講談社.

³ Rose-Marie Makino-Fayolle 訳, 2007年, Éditions 10/18.

と忘れないでいる>という約束を守るため、直子との記憶が薄れつつある 37 歳の「僕」は自分自身の過去、直子と過ごした日々について文章を書くことにする。

便宜的にテキストを内容で区切ると、以下 7 つのまとまりが想定される。

I.	飛行機の中
II.	回想：草原（=19 歳の「僕」が直子に井戸の話を聞いた場所）
III-1	回想（記憶）に対するコメント：19 歳の「僕」
III-2	回想（記憶）に対するコメント：19 歳の「僕」から遠ざかっていく 37 歳の「僕」
IV.	37 歳の「僕」がこの文章を書く理由
V.	回想：井戸→草原での直子とのやりとり（物語）
VI.	この文章を書く 37 歳の「僕」の現在

翻訳されたフランス語のテキストは日本語の原文のほぼ全文を翻訳しており、基本的な文の並びも同じである。

本稿で注目する語る主体の違いが現れるのは、(II)、(III)、(V) の回想をめぐる部分においてである。以下、詳しく見ていこう。

2.2. 分析 1：語る視点の並存

第 1 章冒頭 (I) では、飛行機の中にいる 37 歳の「僕」が 19 歳だったころの自分の記憶（草原の風景）を呼び起こしたことが描かれる。

(I)

僕は三十七歳で、そのときボーイング 747 のシートに座っていた。 [...]

飛行機が着地を完了すると禁煙のサインが消え、天井のスピーカーから小さな音で BGM が流れはじめた。それはどこかのオーケストラが甘く演奏するビートルズの「ノルウェイの森」だった。そしてそのメロディーはいつものように僕を混乱させた。いや、いつもとは比べものにならないくらい激しく僕を混乱させ揺り動かした。

[...]

飛行機が完全にストップして、人々がシートベルトを外し、物入れの中からバッグやら上着やらをとりだし始めるまで、僕はずっとあの草原の中にいた。僕は草の匂いをかぎ、肌に風を感じ、鳥の声を聴いた。それは一九六九年の秋で、僕はもうすぐ二十歳になろうとしていた。 [...]

J'avais trente-sept ans, et je me trouvais à bord d'un Boeing 747. L'énorme appareil descendait à travers de gros nuages chargés de pluie, et s'appêtait à atterrir à l'aéroport de Hambourg. [...]

L'avion s'immobilisa sur la piste, les voyants lumineux d'interdiction de fumer s'éteignirent, et la douce musique d'ambiance s'écoula des haut-parleurs fixés au plafond : c'était la mélodie de *Norwegian Wood* des Beatles, interprétée de manière sirupeuse par un orchestre quelconque. Comme toujours, cette chanson me troubla. Et je dois dire que, cette fois-ci, elle me remua encore plus profondément que d'habitude.

[...]

J'errai à travers la prairie jusqu'à ce que l'avion s'arrête complètement et que les passagers, après avoir détaché leur ceinture, commencent à prendre leur pardessus ou leur sac dans les casiers. Je sentais l'odeur de l'herbe, la caresse du vent sur ma peau, et j'entendais le chant des oiseaux. C'était l'automne de l'année 1969, et j'allais avoir vingt ans. [...]

その次の (II) において、記憶の中の草原の様子が語られ始める。(II) は新しい段落として開始されるが、(I) と (II) の間には空行が 1 行入り、区切りがより明確にされている。(II) の開始部分を見てみよう。(I) が、日本語は過去形 (-タ、-テイタ)、フランス語は *temps de récit* (Weinrich 1971) で描かれる⁴ のに対し、(II) の冒頭の日本語は非過去形 (-ル) であり、フランス語は半過去形が用いられている。(以下、引用テキスト中の分析上注目すべき箇所に適宜下線を引くが、これらは全て本稿筆者による。)

(II)

十八年という歳月が過ぎ去ってしまった今でも、僕はあの草原の風景をはっきりと思い出すことができる。何日かつづいたやわらかな雨に夏のあいだのほこりをすっかり洗い流された山肌は深く鮮かな青みをたたえ、十月の風はすすきの穂をあちこちで揺らせ、細長い雲が凍りつくような青い天頂にぴたりとはりついていていた。

Malgré les dix-huit années qui s'étaient écoulées, je me souvenais encore nettement de ce paysage de prairie. La montagne dénudée, lavée de la poussière de l'été par la pluie fine qui était tombée plusieurs jours de suite, était d'un vert vif et profond, le vent de novembre faisait onduler çà et là les épis des susuki, tandis que des nuages s'effilochaient très haut dans le ciel d'un bleu glacé.

工藤 (1995) によれば、日本語の物語テキストにおける過去形から非過去形への交替は「<作

⁴ (I) のフランス語のテキスト中に 1 箇所現在形が用いられていることにも注目したい。

« Comme toujours, cette chanson me troubla. Et je dois dire que, cette fois-ci, elle me remua encore plus profondément que d'habitude. »

この現在形の使用は語り手の介入と考えられるが、この時点ではどの語り手 *je* の介入なのか特定できず、単にその存在を想起させるにとどまる。後述するように、フランス語のテキストには語り手の存在を前面化する否か、また語り手が誰なのかを明確にしようとする全体的な傾向が観察されるが、この例はその傾向に反する。

中人物の知覚体験性＝内的視点＞の前面化」(ibid., 173)、一人称小説においては「虚構の発話主体による＜かたりのいま＞」(ibid., 175) という視点交替をマークする役割を持つ。この (II) において交替先とそれの場合の解釈として可能性があるのは以下の2つである。

(1) 飛行機に乗っている「僕」の視点

(→飛行機に乗っている「僕」が、自分の持っている記憶を語る)

(2) 飛行機の中の「僕」を描いていた語り手「僕」の視点)

(→語り手「僕」が自分の持っている記憶を語る)

注目すべきは、(II) がどちらの視点で語られるのかを特定する要素がなく、これら2つの解釈が並存した状態で話が続けられることである。そして、この状態は (III-2) の終わりまで、すなわち回想中ずっと維持される。

一方フランス語は、*je me souvenais* と半過去形を使っており、それまでの飛行機の中の様子を語っていたときの時制を変えない。したがって物語世界が継続しているという解釈が優勢になる。当然、ここでこの物語の語り手が物語世界を離れ、自身の過去を振り返って＜飛行機に乗っていた頃の自分は覚えていた＞と述べたと読むことも不可能ではない。しかし、そのように読んだとしても、フランス語では記憶の持ち主が飛行機の中の *je* に特定される点が日本語とは異なる。つまり、先に挙げた日本語のテキストで可能な (2) の解釈、すなわち飛行機内での出来事を描いていた語り手 *je* がその現在の記憶を語るというふうには考えられないのである。

さらに読み進めると、フランス語ではこの草原の風景の描写に単純過去形が使われる。

Je ne voyais rien, à l'exception de deux oiseaux rouges qui effrayés par notre présence, s'envolèrent en direction des bois. Tout en marchant, Naoko me racontait l'histoire du puits.

この単純過去形の使用により、静的な風景描写に動性が与えられ、草原の風景は物語としての前進性を獲得する。つまりこの草原の風景の中での出来事が一つの物語をなすことが理解される。実際、この草原の風景を舞台とする物語は (V) で展開していくことになる。この段階では、そのストーリーが語り手の手を離れ独立した物語として立ち上がっていくことが予告されていると考えられる。

次の段落では、フランス語は日本語と同じように、視点が特定できなくなる。

(III-1)

Le souvenir est quelque chose de bien curieux. Je n'avais pratiquement pas prêté attention à ce paysage au moment où je m'étais trouvé réellement dedans. Il ne m'avait pas particulièrement impressionné, aussi étais-je loin d'imaginer que, dix-huit ans plus tard, je m'en souviendrais jusque dans ses moindres détails.

[...]

1 文目は総称文であり、この文によって記憶に対するコメントがなされているが、どの視点によるコメントなのかは特定できない。可能性としては (1) 飛行機に乗っている「僕」、(2) 飛行機の中の「僕」を描いていた書き手の「僕」の視点が考えられる⁵。いずれの解釈の場合も、2 文目以降は (1) あるいは (2) の視点による自由直接話法と理解される。

しかし、この視点の不安定な状態は長く続かない。次の段落 (III-2) で回想する視点は (1) 飛行機に乗っている「僕」のものに特定される。

(III-2)

Mais maintenant, c'était la prairie qui me revenait d'abord à l'esprit. C'était l'odeur de l'herbe, le vent frais, la crête des montagnes, les aboiements du chien.

Maintenant と半過去形の共起により自由間接話法が想定されるが、これは飛行機内を描いていた物語世界の枠組みがなければ成立しない。つまり冒頭の (I) で立ち上げられた〈飛行機の中〉という物語世界が再び現れ、その登場人物である je が声をあげたと理解するほかない。

それでも同じ (III-2) 中に、2 箇所、現在形が用いられていることに注目したい。

- C'était d'abord son profil qui m'apparaissait. Sans doute était-ce parce que Naoko et moi avions l'habitude de marcher côte à côte. C'est pour cela que c'était toujours de son profil que je me souvenais en premier. Ensuite, elle se tournait vers moi, me souriait, penchait légèrement la tête, me parlait et me regardait droit dans les yeux.
- Mais il fallait du temps pour que le visage de Naoko apparaisse ainsi dans ma tête. Et, au fur et à mesure que les mois et les années passaient, cela en nécessitait de plus en plus. C'est triste, mais c'était la vérité. Au début, il me fallait cinq secondes, puis dix, puis trente, et enfin une minute.

これらの現在形は自由間接話法として半過去形に変更できると考えられるが、あえてその一貫性を乱すのは、物語を描いている語り手 je の存在を示唆したいためではないかと思われる。語り手の je とは、先の (III-1) で視点が不安定化した時に解釈可能な視点としてあった je である。

その後の (IV) で、日本語もフランス語もここまでの回想が飛行機内での出来事であったことが想起され、それを理由にしてこの文章が書かれていたことが明らかになる。ここで読み手は、飛行機の中を描いていた僕 / je とその登場人物として飛行機内にいた僕 / je とが、18 歳のころに見た草原の記憶を共有する同一人物であることを確認する。

⁵ 作者村上春樹のコメントともとれなくはない。

(IV)

しかしハンブルク空港のルフトハンザ機の中で、彼らはいつもより長くいつもより強く僕の頭を蹴りつづけていた。起きろ、理解しろ、と。だからこそ僕はこの文章を書いている。僕は何ごとによらず文章にして書いてみないことには物事をうまく理解できないというタイプの人間なのだ。

Mais, dans cet avion de la Lufthansa à l'aéroport de Hambourg, il ne cessa de cogner dans ma tête, plus fort et plus longtemps que d'habitude. Réveille-toi, essaie de comprendre. C'est pour cela que j'écris ces lignes. Car je suis le type même de l'homme incapable de comprendre les choses tant qu'il n'a pas essayé de les mettre en mots.

以上の分析を整理しよう。草原の記憶をめぐって回想・思考する主体は、日本語では飛行機に乗っている登場人物の「僕」なのか、飛行機の中を描いている語り手の「僕」なのかが未決定にされたまま、話が進められる。一方フランス語は、日本語と同様、回想・思考する主体が不明確になる箇所はあるものの、基本的に飛行機に乗っている登場人物の「僕」が回想し思考するのであり、したがって「飛行機の中」という物語世界の中で行われる。

2.3. 分析 2 : 回想から物語への移行

次に第 1 章後半の (V) を見ていこう。直前の (IV) では物語の書き手「僕」(18 歳の頃を回想する主体) がこの文章を書く経緯が述べられた。続く (V) では、(II) (III) で進められた回想が再開される。そして次第に、その回想は書き手「僕」という特定の人物の思い出という特徴を薄められ、物語として一つの独立した流れに移行していく。その移行の仕方に注目したい。

(V)

彼女はそのとき何の話をしていたんだっけ？

そうだ、彼女は僕に野井戸の話をしていたのだ。そんな井戸が本当に存在したのかどうか、僕にはわからない。あるいはそれは彼女の中にしか存在しないイメージなり記号であったのかももしれない——あの暗い日々に彼女がその頭の中で紡ぎだした他の数多くの事物と同じように。でも直子はその井戸の話をしてくれたあとでは、僕はその井戸の姿なしには草原の風景を思い出すことができなくなってしまった。実際に目にしたわけではない井戸の姿が、僕の頭の中では分離することのできない一部として風景の中にしっかりと焼きつけられているのだ。僕はその井戸の様子を細かく描写することだってできる。井戸は草原が終って雑木林が始まるそのちょうど境目あたりにある。

[...]

「それは本当に——本当に深いのよ」と直子は丁寧に言葉を選びながら言った。彼女はときど

きそんな話し方をした。正確な言葉を探し求めながらとてもゆっくりと話すのだ。「本当に深い
の。でもそれが何処にあるかは誰にもわからないの。このへんの何処かにあることは確かなんだ
けれど」

彼女はそう言うとツイードの上着のポケットに両手をつっこんだまま僕の顔を見て本当よと
いう風になっこりと微笑んだ。

「でもそれじゃ危くってしょうがないだろう」と僕は言った。「どこかに深い井戸がある、で
もそれが何処にあるかは誰も知らないなんてね。落っこっちゃったらどうしようもないじゃない
か」

「どうしようもないでしょうね。ひゅうううう、ポン、それでおしまいだもの」

[...]

De quoi me parlait-elle au juste à ce moment-là ?

Ah oui, elle me racontait l'histoire de ce puits en pleine campagne. Je ne sais pas s'il a vraiment existé
ou non. Ce n'était peut-être qu'un signe ou une image qui ne se trouvait là que pour elle. De la même façon
que, pendant ces jours sombres, elle avait tissé de nombreuses autres choses dans sa tête. Mais, après que
Naoko m'eut parlé de ce puits, je fus incapable de me rappeler la prairie sans lui. Ce puits qu'en réalité je
n'avais jamais vu s'était fixé dans ma mémoire comme une partie indissociable de ce paysage. J'aurais
même pu en faire une description détaillée. Il se trouvait au bout de la prairie, à la lisière du bois. [...]

« Il est profond, vraiment profond, tu sais, m'avait-elle dit lentement, en choisissant ses mots. (Elle
parlait ainsi de temps en temps. Elle parlait avec lenteur, en s'assurant qu'elle avait bien choisi le mot
exact.) Il est vraiment profond. Mais personne ne sait où il se trouve. La seule chose dont on soit sûr, c'est
qu'il est quelque part par là. »

Les deux mains enfoncées dans les poches de sa veste de tweed, elle m'avait ensuite regardé avec un
sourire épanoui, vraiment très beau.

« Mais alors, c'est terriblement dangereux, lui dis-je. Il existe un puits profond quelque part, mais
personne ne sait où il se trouve, c'est bien ça ? Dans ce cas, il n'y a rien à faire si on tombe dedans.

— Non, rien. On tombe, et puis c'est tout.

[...]

まずフランス語のテキストから見ていこう。(V)の冒頭では、草原でのやりとりが書き手 *je* の
記憶であることが複合過去形に使用によって示される(2行目)。しかしその少し後に前過去形、
単純過去形が使用され(5行目)、ここで書き手が記憶を紡いでいることが明示されている世界か
ら物語世界へ、明確な転換がなされる。なお、この前過去形と単純過去形で語られる物語世界は、
(II)の終わりの草原で井戸の話聞いたところとつながっていると考えられる。その後フラン
ス語は、「*J'aurais même pu en faire une description*」から物語世界の登場人物の *je* による自由間接

話法が開始され、「lui dis-je」と単純過去形が使用されるまで続く⁶。

それに対して日本語は、フランス語のように書き手の回想から物語に移行する境目をはっきりさせない。移行をマークする言語的手段がないのではあるが、読み手は物語世界への移行を感じ取らないわけではない。時制を過去形に統一させる、書き手の介入（例えば、モダリティー表現「のだ」などによって）をなくす、かぎ括弧に括られた直接引用を、マーカー（助詞トなど）を伴わずに示すなどは、独立した物語世界の特徴であり、これらの特徴が総合的に増えることで物語世界が確立していく。このことに注目してテキストを見ていくと、回想が物語へ移行したと言えるのは助詞トを伴わない直接引用（「本当に深い。でもそれが何処にあるかは誰にもわからないの。このへんの何処かにあることは確かなんだけど」）が現れるあたりからであろう。

以上の観察を整理しよう。フランス語の書き手の回想から一つの物語への移行は明示的・積極的であり、かつ日本語より早い段階で行われている。一方日本語は、移行は暗示的・消極的で、また移行のタイミングがフランス語より遅い。

3. 考察

以上2つの分析は、語る世界と語られる世界の対立に関する日本語とフランス語の特徴の違いとして、統一的に考えることができると考える。池上(1986)は日本語の特徴として「語り手と語られる対象という主客の対立を常にぼかす方向に働いている」(ibid., 72)と指摘しているが、今回日本語のテキストにおいて見られた現象はこの指摘に合致する。語り手の「僕」なのか、物語世界の中の「僕」なのかを決定しないままにストーリーを展開させていくということは、語る世界の「僕」と語られる世界の「僕」の対立を曖昧にしておくということである。また分析2で見られたように、語り手「僕」の回想から語り手「僕」の手を離れ独立した物語世界への移行が消極的かつ段階的に行われるということは、語り手の世界を語られる物語とを完全に分離させない、つまり主体の世界と客体の世界を連続的に捉え、その間の行き来を許容する姿勢である。一方フランス語には、原作の日本語のテキストに見られる語る世界と語られる世界の対立の曖昧さを一部では表現しながらも、語り手の所在を特定しようとする態度、またその語り手を物語世界の中に見出そうとする姿勢が見られた。またテキストの後半では、語り手の世界から語られる世界への転換が明確に行われた。これらは日本語の傾向とは反対に、語る主体の存在を明らかにし、語られる世界すなわち客体を構築し維持しようとする態度であると言える。

⁶ なお途中、括弧書きにしている部分があるが、この括弧は原文の日本語にはない。

「それは本当に——本当に深いよ」と直子は丁寧に言葉を選びながら言った。彼女はときどきそんな話し方をした。正確な言葉を探し求めながらとてもゆっくりと話すのだ。「本当に深い。でもそれが何処にあるかは誰にもわからないの。このへんの何処かにあることは確かなんだけど」

« Il est profond, vraiment profond, tu sais, m'avait-elle dit lentement, en choisissant ses mots. (Elle parlait ainsi de temps en temps. Elle parlait avec lenteur, en s'assurant qu'elle avait bien choisi le mot exact.) Il est vraiment profond. Mais personne ne sait où il se trouve. La seule chose dont on soit sûr, c'est qu'il est quelque part par là. »

括弧内も直前までと同じ自由間接話法とも読めるが、括弧に入れて区別された回想する主体としてのこの文章の書き手 je の介入と見ることも十分に可能である。

4. おわりに

この論文では、日本語とフランス語の語りのテキストを語る視点という観点から分析、比較し、日本語とフランス語との間で現れた違いに考察を加えた。今回の分析の結果得られた考察が十分に一般化可能であるかどうかは、複数のテキストにあたってはじめて検証される。今回のような語りのテキスト、また語りのテキスト以外のジャンルのテキストを調べてなければならない。また、今回は日本語を原作とする小説とフランス語翻訳をみたが、フランス語を原作とする小説の日本語翻訳も当然見なければならない。

参考文献

Benveniste, É. (1966) : *Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard.

池上嘉彦 (1986) : 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」 日本記号学会編『語り—文化のナラトロジー』 東海大学出版会, pp.61-73.

池上嘉彦 (2006) : 「主観的把握とは何か」『月刊言語』 35-5, pp.20-27.

工藤真由美 (1995) : 『アスペクト・テンス体系とテキスト : 現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房.

Martin, R., Pellet, J.-C. & Rioul, R. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.

Maynard S. K. (1999) : « A poetics of grammar: Playing with narrative perspectives and voices in Japanese and translation texts », *Poetics*, 26, pp.115-141.

泉子・K・メイナード (2003) : 「対照談話分析」 佐久間まゆみ編『文章・談話』 (朝倉日本語講座 7) , 朝倉書店, pp.229-249.

中村芳久 (2009) : 「認知モードの射程」 坪本篤朗ほか編『「内」と「外」の言語学』 開拓社, pp.353-393.

中山真彦 (1995) : 『物語構造論—『源氏物語』とそのフランス語訳について』 岩波書店.

野村真木夫 (2000) : 『日本語のテキスト—関係・効果・様相』 ひつじ書房.

Simonin-Grumbach, J. (1975) : « Pour une typologie des discours », J. Kristeva, J.-C. Milner & N. Ruwet (eds) : *Langue, discours, société : pour Émile Benveniste*, pp.85-121, Paris, Seuil.

Toolan, M. (1998) : *Language in literature*, New York, Routledge.

Vuillaume, M. (1990) : *Grammaire temporelle des récits*, Paris, Éditions de minuit.

Weinrich, H. (1971) : *Le temps : le récit et le commentaire*, Paris, Seuil.

Weinrich, H. (1989) : *Grammaire textuelle du français*, Paris, Didier.

(つだ かおり / 文芸言語専攻 5 年)